

昭和二十二年八月、舞鶴に帰ることができた。

## シベリア抑留記

島根県 小池 繁 徳

大正十四年十一月二十四日、島根県大原郡木次町で出生。寺領尋常高等小学校高等科卒業。家業の農業に従事する。

昭和十八年頃より戦況がだんだんと不利となり、徴兵令が繰り上げとなり、昭和十九年五月、徴兵検査受検、甲種合格となり、同年の秋、現役証書到着。昭和二十年二月、福岡市博多東公園へ集合せよと記入されていた。兵科は野戦重砲兵で、部隊は満州第九三八部隊（野戦重砲兵二〇連隊）となっていた。福岡市で三日間くらい身体検査等のため滞在。満州という寒いところへ向かうためか衣服はすべて一装品が支給された。

博多港より軍用船で釜山へ上陸。乗船中は交代で敵

潜水艦の見張りをさせられた。釜山より軍用列車で満州へ。目的地の部隊まで幾日かかったか忘れたが、途中列車は鑑戸がおろされて外の景色を眺めることは禁止されていた。駐屯地部隊は東安省斐徳というところであった。

野戦重砲兵二〇連隊の編成装備等は次の通り。

昭和十四年十二月編成。九六式十五センチ榴弾砲一個中隊四門保有で、完全編成六個中隊。牽引する機動力として全装軌式の九四式六トン牽引車が各中隊ごとに火砲用四両、弾薬車用四両、計八両が配備されていた。

さらに機械化重砲兵の特質を最大限に発揮せんがため、各中隊の編成下に次の車両が配置されていた。

指揮車 中隊長、中隊附属機関（命令連絡）用として一両。

観測車 指揮小隊長、観測掛射撃諸元算定掛用として一両。

小型車 戦術単位の連絡、命令受領者用として一両。

自動貨車 段列用として、彈藥、糧食、燃料、補助物資、宿泊設備一式で二両。

関特演動員後の二〇連隊の壮容は、戦砲隊六個中隊、指揮班三個中隊、段列三個中隊、合計十二個中隊、総兵員二千二百人の大部隊であった。

昭和二十年二月頃より、ソ連軍の不穏な動向変化を察知し、連隊長以下第一大隊がまず国境線から八十キロほどの牡丹江東部の台地、穆稜<sup>ムツラ</sup>へ移駐を開始。斐徳に残留していた二大隊も中隊長以下五十人くらいが穆稜へ先行して陣地構築作業に着手した。

陣地構築も未完成の昭和二十年八月九日早朝を期してソ満国境を侵したソ連軍百七十四万が猛進撃を開始した。それに対峙した関東軍は七十五万。員数において半分だが、七月、満州で根こそぎ動員された三代、四十代の年寄り兵も含んでの数である。東満の国境線を突破して侵入してきたメレツコフ元帥麾下のソ連第一東方面軍は三十一個狙撃師団、一個騎兵師団、十四個戦車機械化旅団で、火砲迫撃砲一万六百十九門、戦車自走砲千九百七十四両を中心とした機甲軍団

十二万であった。その予定陣地で対峙したのが私の所屬した第五軍直轄野戦重砲兵第二〇連隊と第一二四師団、その数一万三千。しかも、南方及び内地決戦に備えて多くの兵力を抽出し、相対的に装備は貧弱で、性能もソ連軍に劣り、中でも歩兵は牛蒡剣(銃剣の俗称)を唯一の武器とする部隊もあつたと後で聞き及んだ。

牡丹江東部の台地穆稜に布陣をしていた我が部隊の將兵は、彼我の間にそんな兵力の差があるという認識はなく、まして昭和二十年初め、内地から直接満州に入隊して来た我々初年兵は、相互の兵力の内容など知らぬのは当然のことだった。

私の所屬する野重二〇連隊の主力は、我々初年兵が島根、山口、広島、愛媛、徳島などからの現役兵で、二、三、四年兵の主力は北海道と東北地方、五年兵は関西出身の現役兵を中心に編成された関東軍きつての機械化精銳部隊であつた。

ソ連軍が侵攻したこの口、私が所屬する第五中隊長服部中尉は、穆稜から他部隊に転属する初年兵の幹部

候補兵を引率し、あわせて斐徳に残留していた五、六中隊の火砲八門を穆稜陣地に輸送するため斐徳の屯營に帰っていた。したがって、中隊長不在のため後藤見習士官が隊長代理で指揮をとっていた。

八月十一日昼過ぎ頃より、牡丹江街道右側面に布陣していた一中隊の一五センチ榴弾砲四門が、ソ連軍の誇る戦車T三四に対して火を吹いた。T三四型戦車は重量二十八トン、口径八十五ミリ砲を搭載し、装甲板の厚さは七十ミリもある世界でも屈指の戦車であったと聞いた。発射弾約五十発でソ連戦車T三四を四十両近く破壊炎上させた。十二日には態勢を立て直した敵戦車との間で死闘を繰り返し、大砲一門が集中攻撃を受け、残った残弾もなく、夜、自らの手で火砲を爆破、この戦闘によって一中隊は多くの死傷者が出た。

一方、街道左側に布陣していた二中隊も十三日に入つて赫々たる戦果をあげた。たくみな陣地変換によって敵戦車の標的から逃れてきたが、十四日には残弾少なく、火砲四門は健在でありながら、敵の進撃を阻止することができなくなっていた。私たちの五中隊のだ

れもが待ち望んでいた斐徳からの火砲は、隊員の期待に沿うことなく、この日になつても穆稜陣地にその姿を見せなかった。それは火砲の到着が不可能な事態が生じていたからだ。斐徳の屯營にいた服部五中隊長はソ連軍侵入とともに、至急穆稜の主力に合流すべく命令を受け、火砲・車両を指揮し、二日二晩不眠の難行軍の末に勃利駅で貨車搭載して穆稜に向かっていた。しかし、十三日薄暮、牡丹江近くの樺林駅にさしかかった鉄橋上で待ちぶせていたソ連戦車の集中砲火を受けて列車は停止してしまつた。その後、ソ連軍との間に死闘が繰り返され、服部中隊長は戦死し、火砲輸送部隊は壊滅してしまつていた。私たち五中隊は火砲の到着を待ち望みながら各人それぞれタコソボを掘り、全員血気にはやる心を抑え、敵戦車が近づいたら肉薄攻撃を決行すべく待ちかまえていた。

我が五中隊は火砲を持っていなかつたため、その所在を敵に見えられず敵戦車や歩兵の攻撃を受けることがなかつた。火砲を持った他中隊は多くの戦死傷者を出したが、我が五中隊は穆稜陣地で人的被害を受けな

かった。

圧倒的なソ連機甲軍団の進撃に、ついに敵戦車を阻止し陣地を確保することが不可能となった。八月十四日になって松村連隊長は各中隊に後方の一国山方面に部隊陣地の変換を命じた。この命令によって五中隊も隊伍を整えて一国山を過ぎず行軍となった。十四日は途中の路上で夜を過ごした。

十五日の朝を迎えた。その間敵の米襲もなく、全軍が一国山に向け後退することとなったが、次第に一国山に通じる道路がなくなり湿地帯に達したため、裾野から樹林地に道路をつけることになり、伐採班が編成された。しかし、のこぎりやなたの絶対数が不足していたので、各人銃剣を道具として作業が進められた。十五日の夜は一国山での野営となった。その夜、敵の襲撃があり、迫撃砲や機銃掃射の音が鳴り響いた。

十六日の早朝にも襲撃があり、応戦するために配備に就いた。山中でのソ連軍歩兵との戦いでは野戦重砲としての力を発揮することはできない。しかも、残弾も少なく、これでは勝機を得られないと判断した連隊

長の命令で、温存していた火砲、観測車、弾薬などをすべてが破壊された。そして、全責任を一身に背負って連隊長は自決された。部隊は牡丹江までさがって火砲を再受領して戦えということだった。

各中隊ごとに分散して牡丹江を目指しての移動が始まったが、牡丹江市街は十六日すでにソ連軍に占領されているとの情報があり、進入を断念して牡丹江南部の東京城方面を過ぎしての夜間行軍が始まった。

満州の夏は暑い。炎天下飢えと渇きと闘いながらの苦痛の連続だった。敵との接触を避けるため日中はトウモロコシ畑や草地に身を隠し、夜陰にかけての行軍が主体となった。

八月三十日の夕方近く、開けた原野から小高い丘陵に接する付近を行進していたときだった。突然前方にソ連軍がいるから散開せよとの命令がくだった。短小銃と手榴弾しか持っていないが、目に物を見せてくれようと、隊員はただちに散開して戦闘陣形をとった。そのとき前方からソ連兵と日本人通訳が陣営にやって来たという情報が流れた。なにごとならんと皆が緊張

したが、その内容が我々の耳に届いた。

「日本はソ連と講和を結んだから戦争は終わった。ただちに戦闘はやめるように」とのことだった。「講和など関東軍が承服するはずがない。ソ連の陰謀だ」という声が依然と強かった。東京城の一二四師団長椎名中将のもとへ軍使を出して真実を確かめることになったとの情報も伝わってきた。

三十一日朝、全身に朝露を浴びて早くから目がさめた。全員集合の中、隊長より師団司令部で確かめた結果、戦争終結の大詔を奉戴し、関東軍も連合国提示の無条件降伏を受け入れることになった。山に入ってからまで徹底抗戦するもよし、また武装解除を受けるもよい。その判断は各自それぞれに任ずという訓示であった。徹底抗戦を誓って隊列から離れる戦友へ手榴弾等の武器を渡し、我々は武装解除を受けることを決意した。

翌日から夏の太陽のきびしく照りつける暑い中をソ連兵に引き立てられ行き先もわからぬままに行進した。ソ連の兵隊は全く態度が悪い。日本兵の持ってい

る腕時計、万年筆、煙草のケース、懐中鏡等、日本兵が身につけている品物を全部略奪してしまった。敗戦の憂き目をこのときほど感じたことはなかった。

行軍途中、一泊は野宿し、到着したのは披河<sup>ヒカ</sup>の屯営であった。日本軍をここに收容するのだという。この屯営には我々が第一陣で入った。それから次々と日本兵が運びこまれ、屯営の中はごったがえすようになってきた。

ソ連はこのようにして、シベリア抑留の手始めとして武装解除を終えた将兵を中間集結地に收容することから始めた。この時点で我々は今後どのように事態が展開していくか想像だにできなかった。

九月半ば頃から日本兵はウラジオストク経由で日本に帰されるらしいとのうわさが流れた。うわさと軌を一にして屯営を発って行く日本兵もいた。我々が一番早くこの屯営に入ったのになかなか順番が回ってこないの、どうして置き去りにされるのかという焦りの気持ちも生まれてきた。

九月下旬、待ちに待った我々も諸部隊で混成された

千人の将兵で隊を編成し帰還することとなった。武装解除されてから一カ月くらいで故郷に帰れるなんて夢想だにしなかった。

駅頭に待ち受けていた貨車は内部が上下二段にしきられた有蓋貨車であった。上段に古年兵、下段に初年兵が腰をおろした。我々の軍服は開戦以来の野戦野営の連続で泥んこになっていた。衣服の着替えもなく、もちろん入浴もない生活だから、自然にシラミが発生した。もちろんそのままの姿で貨車に詰めこまれた。扉が閉められ外から錠がおろされた。目がなれるまでは暗黒の車内であった。貨車には窓は無く、隅の高い場所に半ば封じられた小さな窓があった。そこから外の景色を見たのか「<sup>スィンガ</sup>綴芬河を通過した」と叫ぶ声が聞こえた。「これで満州ともオサラバだ」「もうすぐウラジオだ」「船に乗って日本に帰れる」。あちらこちらでざわめきが起きた。貨車の中は寒く腹も減っていたが、故国へ帰れるという明るい希望の中に皆が耐えていたのだ。そして夜が明けた。「様子がおかしいぞ。太陽の方向が逆じゃないか。こりゃシベリアに向かっ

ているぞ」。小窓から外の景色を見ていた古年兵の声に初年兵はびっくりした。今年三月満州にやって来たばかりの初年兵は、満州の冬を知らない。しかも、それを上回る寒さといわれるシベリアに連れて行かれるとあっては、一挙に不安が募り足のすくむ思いがした。

貨車は西に向かって不定期に走った。むやみやたらと長く止まっているかと思うと、いきなりひっぱられるような勢いで走り続ける。まったくの気まぐれ運転のようだが、ソ連としては計画的に走らせているのだろう。

貨車の中には便所が無い。貨車が止まっている間にすばやく用便をすませねばならない。本当に曲芸に近い。神経をつかうことおびただしい。列車の運行が何日間であったか記憶にないが、とにかく昭和二十年十月二日夕方、小さな駅に停車し、全員下車を命ぜられた。ここはオブルチェという小さな町だった。夕闇の迫った道を千人の兵士たちはうつむきかげんに元気なく歩いた。やがてひっそりした丘陵の中に鉄条網が張

りめぐらされた二百五十人収容の大きな幕舎が四つ建てられた。

貨車に乗るときには気がつかなかったが、自動車や馬も一緒に乗せられていた。日本へ帰るのになぜそんなものが必要かと考える人たちはそのときははいなかった。シベリアへ連れて行かれ、ああ、やっぱりそうだったかと……。

収容所の中は二段の板張りになっていて、その上にむしろのようなものが敷いてあるだけだった。支給された毛布は二、三人に一枚あるだけ。内務班のときと同様、上段は古年兵、下段は初年兵で、軍隊時代と全く一緒だった。十月初めというのにシベリアの夜はものすごく寒くて就寝ができる状態ではなかった。

朝の点呼にはずいぶん悩まされた。抑留経験者は誰も経験されたと思うが、五列に並べられ、将校が員数の点検をするけれども、数えるたびに数字が合わなくなり、いつも一時間くらい寒さの中で過ごさねばならなかった。

到着と同時に洞窟兵舎建設の作業が始まった。緩傾

斜地を掘り割り、その中に兵舎をつくるのだ。建設作業は大変つらい作業であったが、完成して幕舎から移転した頃から、私は栄養失調と足の指の凍傷により歩行ができなくなってしまった。そのうち入院せよとの通達があり、トラックに乗せられ、ピロビジャン市内の病院へ収容された。二十年の十二月末頃であった。

二十一年三月の終わり頃、退院許可となり、ピロビジャン市駅から西へ向かったが、到着したのはピラカシというところで、保健収容所であった。弱兵を収容して健康の回復後また労働収容所へ送り返す所であった。

六月頃移動命令が出て、三個小隊編成でトラックに乗り、オスモスカヤという全く住居のないところで寒くなるまで道路建設作業に従事させられた。ろくな食べ物を与えずの強制労働だから、ノルマなど達成できるはずがなかった。そして、十月頃再びピロビジャン市内の収容所へ。ここではれんが工場の使役や時には市内にあるソ連将校の宿舎へ警戒兵なしで作業に行くこともあった。昭和二十二年三月の終わり頃、ピラカ

ン收容所へ転属。

四月初め帰国の準備に入り、ナホトカへ二三日の後、いよいよ港へ。岸壁に着いていた「大郁丸」の日の丸を見たときの感激は今でも脳裏から離れない。船上で待ち受けていた看護婦さんの白衣のまばゆかったことが想い出される。四月十日、舞鶴へ上陸。十五日、故郷へ帰郷となった次第である。

## 抑留体験記

島根県 内藤 潔

私は、島根県大原郡木次町において大正十三年十月十三日出生。木次町立尋常高等小学校卒業後、青年学校本科四年卒業。昭和十四年十一月、鉄道省大阪鉄道局米子運転部木次機関区、機関士見習となる。

昭和十九年四月二十日、特別幹部候補生志願合格、中部第一一〇部隊第三一航空通信連隊第一期生（兵庫県篠山町）四カ月の教育を受けた後渡満。満州新京市

第二航空軍教育隊（第一六六九四部隊）河本隊和泉区隊第一班へ配属、昭和二十年六月三十日、教育終了。第二氣象連隊へ転属、満州新京南領八三九八部隊へ。同日付でチチハル第二中隊（衛門屯）飛行場に転属し、通信任務に就いた。終戦の詔勅は同所で聞いたが、混乱はなかった。

八月十七日、チチハル弾薬庫（十三部隊）集合、武装解除。九月二十七日まで同所において起居した。翌二十八日出発、チチハルの付近でエジトンの駅に向かい、当山朝富陸軍大尉の指揮下に入る。十月三日、千五百人の梯団で、東京ダモイにだまされて貨車に詰め込まれ出発。十月二十一日、ソ連領アルマータに着いた。

ここは第一收容所より第四收容所まであり、一收容所で二千人くらい收容する施設だった。日本人千五百人の他、ドイツ人、朝鮮人、イタリア人等先客を合わせ二千人くらいと聞いていた。

ここでの最初の作業は、鋳物工場（カツウラ工場）で油倉庫勤務を二十年十一月二十七日より二十一年三